

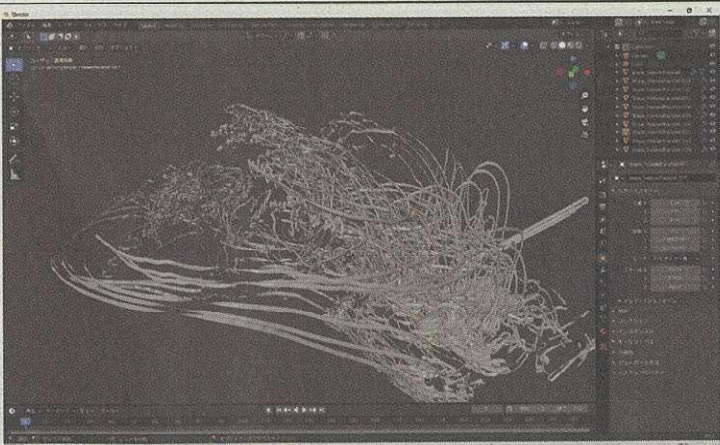
かゆみのポートレイト

アートの現場から

ACAC通信

国際芸術センター青森 (ACAC) で開催中のアーティスト・イン・レジデンスプログラム「OPEN CALL:CALL」さんとうアドゥさんが展覧会を、21日からは、野原さんとうアドゥさんが展覧会を開催します。

村恵、阪中隆文、野原万里絵の3名の日本のアーティストが滞在制作を行い、アメリ・プビエ、アロシア・チツェル、サラ・ウアドゥ、ジャスミン・トゴ・プリスビー、ウリヤナ・ポドコリトヴァのアーティスト5名が海外から遠隔で参加して



引っ掻いているとパートナーに言われたことから、アンコントロールな身体があらわになる、かゆみに興味を持ち始めました。アトピーなどの慢性的なかゆみを調べていくうちに、我慢できない強いかゆみからできたVRグローブで記録された掻く動きからできた形

ゆみによって、本人の意思に反して掻いてしまう悪循環があることや、原因についての考え方が多様で、それぞれの解釈に基づいた治療法が乱立しているように見えてきたそうです。そこで今回の制作では、掻く行為を体から離してイメージとして扱うことで、当事者たちの悩みを脱線させるとともに、これまで掬いあげられなかった身体性にアプローチしていきます。

では、どうやってかゆみから作品をつくるかというところ、手指の動きをトラッキング（追跡）する機能のあるVRグローブを使って引っ掻く動きを記録するという方法をとっています。協働制作に参加いただく方にベッドで寝て自由に掻いて

もらうようにお願いし、リラックスして過ごしていただきます。出来上がった形を見立てたり、経験しているかゆみのエピソードについてもお話を聞いています。

阪中さんは、今回の創作活動はポートレイトを撮影しているようだと話しています。ポートレイトには写真に写る方でさえも知らない表情が表れることがあります。阪中さんの新作もまた、かゆみ自体やそれぞれの人や掻く動きについての新たな側面を発見するポートレイトになるかもしれません。この機会に、ぜひ11月14日からの展覧会へお越しください。

(青森公立大学国際芸術センター 青森学芸員 村上綾)
※第一金曜日掲載